

井出浩先生のご退職に寄せて

2014年度人間福祉研究科博士課程前期課程修了生 國 宗 美 里

1. はじめに

私と先生との出会いは、私が2008年に関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科の第一期生として入学したのちの講義の場でした。私はもともと教職志望でしたが、井出先生の講義をはじめ人間福祉学部の先生方に対人援助職の魅力やおもしろさを教えていただき、気が付けば精神保健福祉士としての道を歩んでいました。

大学を卒業して大学院に進学してからは、ゼミ生として服部さんとともに井出先生に師事しました。そして、大学院を修了して数年経った今も井出先生にはたくさんの支えをいただいております。

最初にこのご依頼をいただいたときは、「たくさんの学生がいるなかで何故私なんか？私で大丈夫かな？」と少し驚きましたが、大変貴重な機会をいただけたことに感謝し、拙筆ではありますが井出先生との思い出を書かせていただきます。

2. 井出先生との出会いー大学時代ー

先述したとおり、井出先生との出会いは大学入学後の講義でありましたが、より先生の近くで学ばせていただくようになったのは、大学4年次の精神保健福祉士の実習のときでした。実習に行く前に、社会福祉学科の松岡克尚先生、井出先生、実習支援室のスタッフの皆様が主催してくださっていた実習参加予定者向けの勉強会があり、そこで井出先生から精神医学の知識やクライアントと向き合う時の基本姿勢を丁寧に教えていただきました。

この頃の私は恥ずかしいことに、かなり生意気で、自分がしたいことは誰に何を言われようがお構いなしに貫徹するが、興味がないことには全く見向きもしないという“超”偏屈者でした。もともと児童思春期の子どものメンタルヘルスに興味があり、このとき教職課程も同時履修していた私は「精神保健福祉士の実習も教育実習もどちらも行けたら自分にとって良い経験となる」という思いがあり、4年生で2つの実習をこなすつもりでいました。

しかし、当然ながら「そんなことできるわけがない」「本気で精神保健福祉士を志す思いがないのなら実習先にも迷惑になる」と思う方もおり、実習支援室のスタッフの方からは今でも鮮明に覚えているほど大目玉を頂戴しました（学生のとときの私はそんな周りの心配は露知らずでしたが、今思えば実習支援室のスタッフの方のおっしゃっていたことはごもっともです。当時の教員・スタッフの皆様には大変なご心配とご迷惑をおかけしました）。

そんな「先生から見ると嫌なタイプの学生」でしたが、井出先生や松岡先生のご理解と取りはからいもあって、最終的にはどちらの実習にも参加させていただけることになり、充実した大学最後の年を送ることができました。

2つの実習に参加した結果、教育現場と福祉現場の相違点を見比べ、それらの対比からより福祉的な視点を深めることができたように感じ、そのことを勉強会の場で話していると井出先生が「しっかり学ばれてきましたね」とおっしゃってくれ、「不安もあったけど、やり遂げられて良かった」と感じることができました。

今振り返ると本当に「若気の至り」だったと思いますが、そんな私を許し、優しく迎え入れてくださったのは、井出先生や松岡先生の存在が非常に大きかったと感じています。松岡先生は学生にしっかりと論

理的にアドバイスをして、時には叱咤激励くださりつつ支えてくださるような存在であり、井出先生は多くは語らず、学生を見守り、適切なタイミングでそっと手を添えてくださるような先生でした。

そのお二方の先生の絶妙なバランスに支えられ、時に井出先生の優しさに癒され、こんな私も無事に精神保健福祉士になることができたと思っています。

3. 修士論文に苦しんだ日々—大学院時代—

精神保健福祉士の実習に参加し、その楽しさややりがいを感じた私は「卒業後は精神保健福祉士として福祉の現場で働く」ということを意識するようになりましたが、まだまだ自分には勉強が足りないと思い、大学院に進学することを決めました。

先述したとおり、児童思春期領域に興味があった私は井出先生のゼミに所属することにしました。毎週井出先生の研修室で、マラーの分離個体化理論やエリクソンの心理社会的発達理論について時間をかけて学び、児童思春期の精神医学や発達心理学について井出先生より直々に基礎から学ばせていただくことができました。修士2年になってからは服部さんも加わって互いの研究内容についてディスカッションしたり、たまに私たちが「ああでもないこうでもない」と考えあぐねていると井出先生がコーヒープレイクの時間を作ってくださいまして3人でのんびりとお話ししたりと、今思い返すと本当に贅沢で貴重な時間を過ごさせていただきました。

しかし、私自身は大学院で学ぶなかで研究に行き詰まりを感じるようになり、「結局、現場を知らない院生の自分がどれだけのことを研究で表現しきれるのか」という思いが強くなって焦りが出るようになりました。

そういった問題があるなかで同時に就活の問題も降りかかってきて、他の同級生たちはリサーチクエスチョンを絞り、どんどん修士論文を書き進めるなかで、私の筆は遅々として進まず、一体いつになったらアンケートができるのか、論文の構成はどうするのか…という状況でした。全く前進のない私の報告に井出先生は内心「やれやれ」と思っていたかもしれません。それでも先生は急かすことなく、ゼミでも落ち着いた雰囲気を保ち続けてくれていました。それが私にとっては本当に救いであったと思っています。

一時期は修士論文そっちのけで就活に勤んでおり、調査に取り掛かるのが誰よりも遅かった私ですが、「先生、質問紙できました！」と言うと井出先生はすぐにチェックしてくれ、質問用紙を配布する学校についても先生が「この学校はどうでしょう」と調整をしてくださいました。

私は「児童思春期の子どもの生きづらさ」というテーマで研究をしていたので、質問紙のなかには「これまでに、『消えてしまいたい』『いなくなってしまう』と考えたことがある」などといったやや侵襲的な質問もあり、当然ではありますが学校側に「この内容では生徒に配れませんね」と言われてしまうこともありました。そのときは仕方ないこととはわかりつつも内心落ち込みましたが、それでも井出先生と一緒に解決策を考えてくださり、一緒に学校に行き交際していただきました。非常に難しいテーマだったので、先生にはたくさん苦勞をおかけしたと思いますが、そんな雰囲気を一切出さず、私が研究に打ち込めるような環境をつくってくださいました。

そうやって、七転八倒しながら書いた修士論文は結果的に優秀賞をいただくことができ、修了式では代表として登壇させていただくことができました。もしも、あのとき取り掛かりが遅いと叱られたり、急かされたりしていたら、私は何もかもが嫌になっていたかもしれません。全くもって優秀な学生ではなかった私が大学院を無事に修了できたのは、そんな私を理解し、ただ穏やかに見守り、私が立ち直ってきたらちゃんと一人でできるようにそっと手を差し伸べてくださった井出先生のはからいがあったことだと思います。

4. 精神保健福祉士として社会に出て－社会人時代－

こうして、井出先生と一緒にゼミに所属していた服部さんの助けもあって、苦しい大学院時代を切り抜け、晴れて2014年の春から某市役所に精神保健福祉士として入庁しました。

最初の配属は区の保健センターでしたが、相談員は私を含め3人だけだったので、入職してすぐさまに地域の最前線で相談業務を担うということになり、出逢った多くのクライアントにたくさんのことを学ばせてもらいながらではありましたが、立ち止まって考える暇もなく、ただがむしゃらに前を進むしかない日々が続きました。

今振り返るとその日々が精神保健福祉士としての自分の財産になったと感じますが、院生の頃は壁にぶち当たって迷ったり、悩んだりしたときにはいつも井出ゼミでひとしきり話を聞いてもらっていて、井出先生がそれとなくアドバイスをくださってそのことが自分の気づきになることが多くあったので、そういった機会が無くなったときに強く不安を感じました。働き始めてからずっと張り詰めた状態でしたが、卒業後も井出ゼミのメンバーで集まることもあり、私が実践の中で悩んだことを井出先生にありのままに話すと「そういう悩みや気づきに辿り着いたということは、良い実践をされている証拠ですね」とふっと言ってくださったことを覚えています。そのときに、肩の力が抜けて「これで良かったんだ」と思えました。井出先生は本当に不思議な力を持っておられる方で、いつもそうやってさりげなく私たちが欲しい言葉をここぞというタイミングでかけてくださるのです。

また、大学から大学院をとおして井出先生に師事してきた私にとって、精神科医のモデルは井出先生だったので、社会に出て実際に精神保健福祉士として働くなかで、他の精神科医と接するとき、医師の医学モデルの見地に対し、ソーシャルワーカーの生活モデル的視点をどう理解してもらうか、四苦八苦することも度々あり、そのときに「当たり前のように感じていたけど、井出先生のような精神科医の存在は貴重だったんだ」と強く感じたものです。

井出先生は神戸市の養護教諭の先生方の勉強会などにも積極的に参加され、地域の保健福祉や教育の分野に携わる人たちにとって、身近な存在でいようとされた先生であり、実際にお会いした神戸市の養護教諭の先生も「神戸市の養護教諭にとって井出先生はとても大きな存在である」とおっしゃっていました。「医者」というとなんだか遙か遠い存在のように思えてしまうのですが、井出先生はそういった壁を自ら取り払って、現場や地域に心を寄せていく姿勢を絶えず持ち続けられておられました。学生時代にそういう井出先生のお姿を近くで見られたことが何より大きな学びであったと今実践を積み重ねるなかで身染みて感じています。

そして、大学院時代の頃、井出先生が教えてくださったお話のなかで、今も私のなかで大切な拠り所となっているものがあります。それは、「よく医者は『患者に巻き込まれてはいけない』と言う。私も医者になりたてのときに周りからそう聞いて、巻き込まれたらいけないと思っていた。でも、患者さんと距離を置こうとした結果、関係性が築けなくて、治療もうまくいかなかった。結局、その人の世界に一度足を踏み入れて巻き込まれてみないと、わからないことばかりで関係性なんてできないんです。だから、一緒に揺らいだらいい。ちゃんと支援チームを組んでいるなかでなら少々揺らいだって大丈夫です」というものです。この話を聞いたときは、まだ学生でしたから頭のなかで何となく先生が言っていることを理解するような感じだったと思いますが、今こうやって実践をするなかで感覚的にも理解できるようになったと思います。

福祉の現場でも、「クライアントに巻き込まれる＝ダメなこと」というような図式がなぜか一部では存在しています。しかし、私は先生のこの言葉を拠り所にして実践をやってきたなかで、身をもって「その人が何を見て、聴いて、どう感じてきたのか、一度同じ目線に立って、その人の世界観と一緒に共有しなければ本当のニーズにたどり着くことはできないし、関係性を築くこともできない」ということを何度も経験しました。クライアントと一緒に考えて、一緒に揺れて、時に遠回りながらも、共に同じ時間

や悩みを共有することが、知識や技術よりもはるかに大切なことで、どんなに重い病のなかにある人だったとしても、時間を重ねていけば、必ずその人の言動のなかにはその人なりの「想い」があることがわかりました。

だから、今でも井出先生のお言葉を借りて後輩に「巻き込まれるのは悪い事じゃない、クライアントと一緒に揺れて考えたらいい」と伝えることがあります。それくらい、先生の言葉は私のなかで重要な実践の指針となっているところがあります。

今、こういう機会をいただいて、改めて井出先生との思い出を振り返っていると、自分でもびっくりするくらいに、自分のそこかしこに井出先生から教えていただいたことが生きているのだなと感じます。井出先生に臨床姿勢を教えていただいたことが、私の精神保健福祉士としてのキャリアにも深く影響しており、井出先生のもとで学べたことが本当に自分の人生にとっての幸運であり、大きなターニングポイントだったと思います。

5. これからのこと

こんなことを書くとおっしゃった先生方にお叱りを受けそうですが、正直にいうと大学院で疲れ果てた私は「もう研究をすることはないだろう」と思っていました。しかし、ひょんなことから就職してからも精神保健福祉士の専門性についての論文を書くことになったり、学会発表することになったりしました。また、大学時代と大学院時代に書いた私の論文要旨を遠く離れた北海道の大学生たちが見つけてくれ、わざわざ私の職場を探してあててくださった大学から「論文を読ませてほしい」と電話をいただき交流が生まれるなど、何だか不思議な巡りあわせのなかでまた研究に出会い、筆を走らせている自分がいます。

地域でおこなわれている様々なソーシャルワーク実践は本当に素晴らしいものが多いのですが、そういった実践の数々を論理的に研究して外に発表していくというのは福祉分野にはまだあまり根付いてはいません。だから、ほんのちょっと研究をかじったことがあるというだけの私の何でもない能力が想像以上に有難がられることがあります。

今は実践を積み重ねることが自分にとって一番大切なことであると感じていますし、これからも市の精神保健福祉行政の第一線で生きていきたいと感じていますが、大学では松岡克尚先生が、大学院では井出先生が教えてくださった研究に対する姿勢やその手法が、今こうやって私の肥やしとなっているので、そこを活かしていけば今よりもっと「おもしろいこと」ができるのではないかと感じています。

その「おもしろいこと」は自分のなかでもまだほんやりとしています。市の相談員が長年積み重ねてきたソーシャルワーク実践の研究をとおして、実践のなかにある精神保健福祉士の専門性や価値を「可視化」「言語化」し、さらにそれらを発信していく取り組みができたらいいなと思っています。

ソーシャルワーク実践というのは、もちろん価値や倫理、様々な実践手法に裏打ちされた専門技術ではあるのですが、ただ勉強すれば習得できるというのではなく、実践のなかで感覚的に身に着けていくものでもあります。また、「対人援助」は生身の人間同士の関係であるので、理屈だけではどうにもならないことも多く、決まったパターンがあるわけでもなく、人や場面によってどのようにでも移り変わっていきます。そのため、「ソーシャルワークの視点」や「私たちが実践で何を考えどう支援しているのか」ということを論理的に紐解いていくのは至難の業といえると思います。しかし、そのための努力をしていくことは大切であると考えますし、それが私たちソーシャルワーカーの専門基盤を固めていくことにもつながり、延いてはクライアントとのより良い相談関係の在り方を模索していくことにもなると考えています。

「もう研究なんて…」と思っていた私が改めてこういった視点を持てるようになったのも、井出先生と過ごした修士課程の2年間があったからだと思っています。あの時苦しんだことも含めて何一つ無駄にな

らず、私のなかで糧となっています。先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

6. おわりに

つい先日、とある心理士の方が教えてくださった言葉で私が好きな言葉あります。それは「私たち専門職はクライアントに対して、すぐ『Do』したが、一番大切なことは『Being』である」というものです。これは「専門職は相談に来たクライアントに対して、良かれと思って支援しようとしたり、何らかのサービスにつなげようとしてしまう（=Do）が、それよりもクライアントと共にその場に存在し、共に考える空間や時間（=Being）のほうが大切である」ということを表した言葉なのですが、井出先生はまさしくこの言葉を体現されていると感じます。

井出先生は豊富な臨床経験を持っておられるのに、学生相手にもいつもフラットで、何かあったときもただその場において、こちらの話を聴いてくださるような温かさがありました。それは多くの言葉や「答え」をいただくよりもずっと安心感があったのです。井出先生は決して私たちに何かを押しつけることなく、臨床のなかでの大切な視点をそういった井出先生自身の姿勢をもって教えてくださるような先生でした。

そんな井出先生ですから、退職されたあともきっと色んなところからお声がかかり、先生のお気持ちとは裏腹にお忙しい日々を送られることでしょう。どうかお体ご自愛ください。そして、また井出ゼミで美味しいご飯を食べに行きましょう。井出先生には私も服部さんもいつも聴いてほしいことがたくさんあって先生を困らせてしまうかもしれませんが、これからも私たちが温かく見守っててください。